

患者であるエンドユーザーと一体となつて進めながら、医療・福祉分野のさらなる発展に貢献していきたいと考えています。

最後に、九州大学病院リハビリテーション部診療准教授の高杉紳一郎先生に「リハビリで活躍するロボットの未来」という演題で、リハビリの現場で活躍している電動椅子ロボットやリハビリゲームなどの紹介とともに、高齢者リハビリテーションや介護予防・転倒予防などについて講演をいただきました。内容の概要は次のとおりです。

日本は本格的な高齢社会を迎えました。これからは高齢者がいきいき動いて楽しめる社会を実現しなければいけません。高齢者が寝たきりになる原因は、第一位が脳卒中、二位が認知症、三位衰弱、四位骨折、五位関節疾患と続きます。骨折と関節疾患を合わせると、一位の脳卒中とほぼ同じ割合になります。足腰が衰えると、自宅でも転倒することがあるので要注意です。衰えを予防するには、足腰の筋肉を鍛える必要があります。できる限り、楽しみを見つけないがら体を鍛え、機能を回復したいものです。

そこで私たちは、ボートを漕ぐ動作で効果的に足腰を鍛えるロボットを開発しました。操作中は画面にジャングル探検のアニメ画像が映し出され、臨場感を演出してくれます。また、さまざまな足のリハビリ屈伸運動を行ってくれるロボットも造りました。これにより、リハビリを行う療法士の負担を軽減できます。こうしたロボットの利点は、疲れ知らずで同じことを何度もやってくれ、他人に気

兼ねせずに済む、訓練効果を数値などで確認できるといったことです。

「ロテム」という車いすロボットも造りました。これは、前に少し動くだけでベッドから簡単に乗り移ることができます。衝突を避ける制御機能や、サドルを上下する機能も備わり、外出が楽しくなる格好いいデザインになっています。

ゲーム機をリハビリに活用することにも取り組み始めました。メーカーに要求したのは、説明書を見なくても容易に操作でき、絶対に転ばずに足を鍛えるゲーム機でした。「ドキドキへび退治」というマシンは、座った状態で操作、四つの穴から出てくるへびの頭を足で踏むと引つ込み、得点が入るというものです。面白さに加え、へびの顔が少しだけ気持ち悪いけれどかわいい、いわゆる「キモかわいい」見た目が利用者に好評でした。

熊本県の認知症モデル事業として、このマシンを県内三方所の高齢者施設に納めたところ、これに関心を持ったオランダの視察団がやって来ました。同国にはゲームセンターがないそうで、若者から高齢者までが楽しめるゲーム機を同国で製造するプロジェクトが始まりました。

「継続は力なり」、リハビリは長く続けることが重要です。常に新しいことに心が動き、楽しく取り組める高齢者になっていただければ、体の維持・回復だけでなく、認知症の予防にもつながるはずです。

会場には、講演で紹介された癒やし効果を持つ心理的効果、血圧や脈拍を安定化する効果を持つ生理的効果、コミュニケーションの話題を活性化化する社会的効

果などが期待される「メンタルコミットロボット・パロ」、人間の意思をセンサーで感知・反応して装着者の下肢動作や歩行をアシストする「ロボットスーツHAL福祉用」、車いすや電動カートの代用となる「ユニバーサルビークル・ロテム」などロボット三体が展示・デモンストレーションされ、参加者は休憩時間などを利用して操作・試乗などを体験しました。

約一七〇人の来場者があり、内容を、十一月十九日の新聞紙面に掲載しました。第四十五回は平成二十四年二月二十五日(土)に「認知症を考える医療・介護・地域支援のいま」と題してくまもと森都心プラザで開催しました。

高齢化が進むにつれて、今後増え続けることが予想される「認知症」は、本人にとっても家族にとっても関心が高く、「認知症」の予兆的な症状や病態などの基礎知識や最新の治療法、支える家族としての接し方や生活などについて、四人の先生方に講演をいただきました。また、早期診断・治療体制の全国的なモデルとなった「熊本モデル」についても紹介がありました。

司会は西勝英肥後医育振興会副理事長(熊本大学名誉教授・桜十字病院総院長)がとつとめ、講演では池田学先生(熊本大学大学院生命科学研究所教授)に座長をお願いしました。

最初に熊本大学医学部附属病院神経精神科の橋本衛先生から「認知症とはどんな病気か」病状から診断、治療まで」の演題で、誰にでも起こりうる認知症を予防・介護するためには認知症を正しく

理解することが大切であるという観点から、認知症の症状から、診断・治療までについて講演をいただきました。内容の概要は次のとおりです。

物忘れには通常の老化によるものと、病気による異常な物忘れがあります。

病気による物忘れは出来事そのものを忘れてしまうことが特徴です。例えば三日前に外食をした場合、何を食べたかを思い出せないことは健常者でも起こり得ますが、外食したこと自体を忘れていたならば、認知症が強く疑われます。また、病気による物忘れは半年程度で進行し、本人に自覚がないなどの特徴があります。認知症でみられる症状はさまざまですが、大きく二種類に分類できます。

一つは以前できていたことができなくなる症状で、中核症状と呼ばれています。食事をしたことを忘れる、家族の顔が分からない、道に迷う、話が通じない、尿便失禁などがここに含まれます。

もう一つが認知症になることにより新たに加わる症状で、周辺症状と呼ばれており、徘徊、怒りっぽさなどの精神症状行動障害が含まれます。中核症状は治療ができず周囲からの援助で対応するしかありませんが、周辺症状は適切な治療により改善が期待できます。

認知症を引き起こす病気は数多くありますが、それらは治療の観点から三つに分けることができます。

一つ目は、治る認知症で、その代表は正常圧水頭症です。脳脊髄液が脳の中に異常にたまり、脳を圧迫することにより引き起こされますが、手術により改善します。

また薬の副作用で認知症になることも